

表紙に寄せて

shushu

今回 shushu が担当したのは裏表紙になります。表紙は別の方の担当です。素晴らしい表紙絵を早期に完成させていただいたので、それに絵柄を合わせてみようかとか考えながら、インスピレーションのものにさせていただきながら、描きました。という事で、『表紙に寄せて』というのもちよつと違うかもしれませんが、これを習慣にしてみたいという気持ちもあるのでこのまま行きます。

絵だけ描いても絵は出来ない。

べつに私は絵だけ描いているわけではない。三重の意味でそれはそうである。

ひとつは、それを仕事にはしていないという事。まず私は学生だし、実力的にもイラストレーターではない。必然、俗に本業と言ったりする方をまずやらねばならない。これは、社会的には趣味、と呼ばれ、余暇で慰みに楽しむものとされている。

ふたつめに、私はその趣味と呼ばれるやつが多い。それも、なにかを見るとか観戦するとかではなくて、だいたいなにかをつくったりすることだから時間がかかって仕方ない。かといってなにかをつくるためには豊富になにかをみる必要がある。だから本場に仕方がない。あと普通に家事したりもの食ったり、寝たりもしなきゃならないわけだけど、客観視すればするほどひとはそれを忘れてたりする。

みつつめはそのふたつが引き起こしているというところもある。

私は絵を描くことを悩む。

絵の題材に悩むし、絵の構図にも悩むし、絵の描き方にも悩む。

でもそれ以上に、絵を描いていていいか、すごく悩む。

絵以外のことをして、絵について悩むと、時間がなくなる。そりゃそう。そうして本業のほうに支障が出てもしようもない。それなにもかも中途半端になるんじゃないか、なにもかも無駄なんかな、とか、全部やめれば楽なんかなとか、でもうまくやめた自分が想像できんな、とか、いつそ自分の代替可能性に自覚的になれよ、とか、いろいろ考える。正直、なにが必要で何が必要なのかってわからない。そういうのってわからないことらしい。わからないことがわからないことだと受け入れられないでよくよ悩んでるのが一番不毛なのかもしれないけど、でもわからないってわかったって何の解決にもならない。

はつきり言って、そんなことは描いた絵には出ない。(なんか力のある人は見抜くのかもかもしれないけど、)ひとには伝わらないし、

大概描いている絵には関係なかったりするときはそれらを反映しない。そういうのは殆ど全くその絵には関係がなくなっていくものではあるけれど、描いている身としては、ひとの描く絵はひとりでできるものではないと知っている。

ちよつとした機会に、たまにはそんなことも考えてみる。

今回してみたのは、そんな、絵に全く関係のない話。